

一般社団法人 日本リスク研究学会

学会URL

<http://www.sra-japan.jp/cms/>

日本リスク研究学会誌

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sraj/-char/ja/>

日本リスク研究学会 設立趣意書

- 我が国は、高度産業社会として、その産業経済の規模を拡大し、情報化社会へとその内容を大きく変化させてきました。これらの発展の原動力である科学・技術はその革新的な効用と共に、技術の開発と運用に係わる様々な不確定性(リスク)が内包されているために、それらのリスクの適切な評価と管理に対して広く科学者や市民の関心が高まってきました。
- 本学会の生みの親であるリスク分析学会(The Society for Risk Analysis)は、1980年に健康、安全、環境へのリスク問題を個別学問分野を越えて学際的な展望のもとで取り扱おうとする人々により設立されました。学会の活動はこれまでのところ米国を主として展開されてきましたが、1986年には、ヨーロッパの12ヶ国によってSRA-Europeが発足し、当初の目的のひとつであるリスク研究の国際的な交流の基盤が整えられてきました。
- 我が国においても、防災、医療、公衆衛生、安全、公害、環境汚染などのリスク問題は、自然科学、医学、工学、社会科学等の個別分野ごとに研究されてきましたが、高度産業技術社会をむかえて、学際的かつ国際的な視野をもったリスク分析とリスク管理の必要性が認識されてきました。
- 関連研究分野におけるリスク研究の相互理解と協力を促進すると共に、これまでの国際交流をさらに継続発展させ、国際的な連携を深めるために本学会の設立を提案するものです。自然科学、工学、社会・人文科学等の専門分野を越えて多方面の研究者の皆様のご参加をお願い致します。

本学会の特徴

- リスクコミュニケーションは分野によって多様であり、食品、医療、災害、化学物質等、様々な分野で、リスク評価、リスク管理、リスクコミュニケーションの実績がある研究者を抱えている
- 本学会は、「コミュニケーション」の部分に必要な社会科学系の研究者も多数参加し、学際性が強い

自然科学系： 環境リスク、生態学、食品安全、化学物質、放射線
社会科学系： リスク心理学、社会心理学、保険・金融など

学会誌

日本リスク研究学会誌(季刊)

Journal of Risk Research (Europe-SRAとの共刊)



これまでの取組み -1

リスク学事典(増補改訂版)

- ・ 発行元:(株)阪急コミュニケーションズ
- ・ 発行年月:2006年07月



日本リスク研究学会の全面的な協力を得て2000年に刊行されたわが国初の本格的な「リスク学の総合事典」の増補改訂版です。防災科学、公衆衛生、環境医学、環境工学、放射線科学、保健学、社会心理学、災害心理学、経営学など、個別分野における「安全の科学」をふまえて発展した、総合的政策科学としての「リスク学」の成果を体系的に紹介しています

これまでの取組み -2

リスク学用語小辞典

- 日本リスク研究学会 編
- 発行元:丸善(株)出版事業部
- 発行年月:2008年01月



- 日本リスク研究学会が編纂する, 初めてのリスク関連用語の辞典. 全12領域・約1,600語を収録, 広範かつ専門性の高い用語を平易に解説. 自然科学, 社会・人文科学分野にまたがる諸分野の研究者, 企業・官公庁・自治体の実務者, NPO関係者に必携の書.

これまでの取組み -3

東日本大震災対応 1

東日本大震災特集（学会誌論文）

- [東日本大震災におけるリスクコミュニケーションと不確実性を巡る問題](#)
- [放射線リスクと除染・帰還](#)
- [リスク評価の面から見た化学物質と放射線の共通点と差異](#)
- [東日本大震災における粉塵吸入による長期健康影響—アスベストのリスク評価を考える](#)

- [リスク学から見る「想定外」問題：低頻度・巨大複合災害のアセスメントとガバナンスの再考](#)
- [「想定」を再考する—福島の実験をもとに](#)
- [低頻度激甚災害のリスクに関する考察](#)
- [リスクガバナンス論から見た震災復興過程で懸念されるリスク](#)

- [低頻度大規模災害への対応を検討する視点](#)
- [安全学からみた東日本大震災の教訓](#)

- 日本リスク研究学会誌 21巻3号、21巻4号、22巻1号に掲載（J-STAGEで閲覧可能）

- **東日本大震災に関する英文冊子の発刊(ブックレット)**

Emerging Issues Learned from the 3.11 Disaster as Multiple Events of Earthquake, Tsunami and Fukushima Nuclear Accident

- 日本リスク研究学会では、東日本大震災に関するリスク研究について、これまで東日本大震災対応特別委員会が中心となって、2011年度年次大会でのふたつの特別セッション、World Congress on Risk 2012での二つのシンポジウム、それに日本リスク研究学会誌での特集記事などの形で会員相互の議論を進めた
- 今回それら成果を海外に発信すべく、上記の論文や発表の概要版を集約したブックレットを電子出版

これまでの取組み -5 リスクコミュニケータートレーニングプログラム

市民・マスコミとのリスクコミュニケーション ―基本と実務

2004年3月13日(土) 9:30-18:00

- 目的は、優れたリスクコミュニケーションの担い手を養成すること、リスクコミュニケーションを支えるシステムを構築すること
- 基本編
 - トレーニングの目的
 - 効果的なリスクコミュニケーション: 内容編
 - 効果的なリスクコミュニケーション: 表現編
 - リスクコミュニケーションを支えるシステム作り
 - 効果的なクライシスコミュニケーション
- 課題1: O157事件への対応
- 課題2: MTBEによる地下水汚染

最近の学会誌から拾ったリスコミ関連論文

- 日本人のリスク認知と個人の属性情報との関連
日本リスク研究学会誌 Vol. 22(2012) No. 2
- 食品由来のハザード別にみたリスク知覚構造モデル
日本リスク研究学会誌 Vol. 21(2011) No. 4
- 東日本大震災におけるリスクコミュニケーションと不確実性を巡る問題
日本リスク研究学会誌 Vol. 21(2011) No. 3
- 技術リスクに対する専門家と市民の視点 : 一般市民との乖離を感じる専門家の特徴
日本リスク研究学会誌 Vol. 21(2011) No. 2
- 情報提供が人々の便益認知およびリスク認知に与える影響
日本リスク研究学会誌 Vol. 20(2010) No. 3
- 日本人のハザードへの不安とその低減
日本リスク研究学会誌 Vol. 20(2010) No. 2
- 地域リスク問題をともに考える住民参加型プログラムの開発 : スモール・スケール・マイナーの事例
日本リスク研究学会誌 Vol. 20(2010) No. 1
- 新型インフルエンザのリスク認知とリスクコミュニケーションのあり方に関する調査研究
日本リスク研究学会誌 Vol. 20(2010) No. 1
- リスク・コミュニケーション再考
日本リスク研究学会誌 Vol. 19(2009) No. 3
- リスク認知・リスク判断は感情か理性か : リスクコミュニケーションにおける訴求効果
日本リスク研究学会誌 Vol. 19(2009) No. 2

取組1: リスクマネージャ制度の推進

◎リスクマネージャに必要とされる資質とは

- ・リスク評価プロセス理解力、リスク対話力、リスクマネジメント力
＋分野横断的リスク理解力

◎2006年より、学会では「リスクマネージャ」と「リスクマネージャ養成プログラム」の両方の認定制度を行っている。

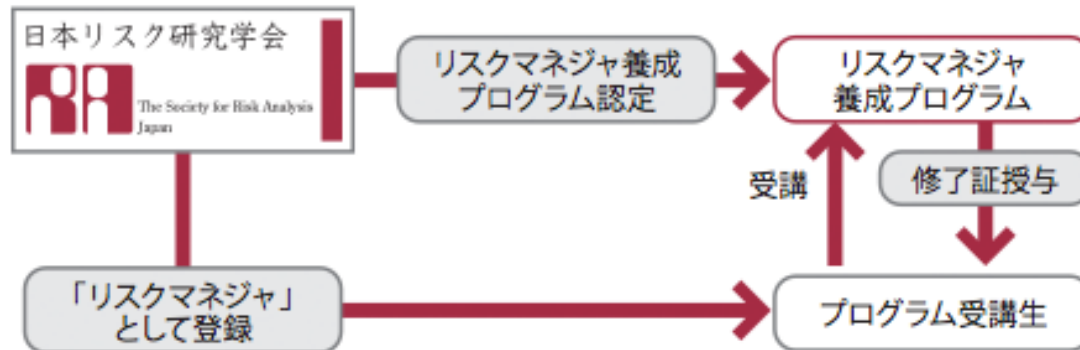
◎リスクマネージャは、①認定プログラム修了者、もしくは②書類審査による認定者。これまでに認定を受けたリスクマネージャは約100名。うちほとんどが環境分野。リスクマネージャは学会HP上で氏名を公開。

◎認定制度の見直し・普及、分野拡大、実践者との連携強化を実施中。

⇒こうした取り組みによる成果

- ・リスクとコミュニケーション両方に精通した人材の育成・選別
- ・リスクコミュニケーションの品質管理

リスクマネジャ制度



リスクマネジャの活躍の場

チーフリスクオフィサー (Chief Risk Officer)

コンピューターセキュリティ、法律遵守、訴訟などビジネスにおける様々なリスクを評価し、計画立案する専門家。米国では、パーゼル・アコード、サーベンス・オクスリー法に対応する職として注目されています。

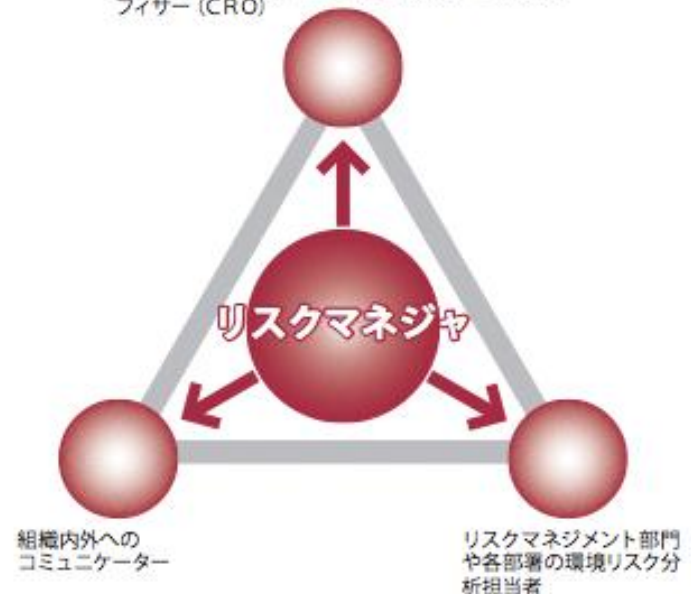
リスクコミュニケーター (Risk Communicator)

社会を取り巻くリスクに関する正確な情報を、行政、専門家、企業、市民などのステークホルダーである関係主体間で共有し、相互に意思疎通・合意形成を図るための専門家です。

リスク分析責任者 (Risk Analyst)

潜在的なリスク発生源を特定し、そのリスクが発生する可能性と、発生した場合の影響の大きさを評価し、マネジメントのための対策を提供する専門家です。

リスクマネジメント部門やコンプライアンス室の環境リスク管理部門担当者あるいは、チーフリスクオフィサー (CRO)



取組2: タスクグループによる活動

■ リスクコミュニケーションTG

- ポスト3.11社会に対し、多様な分野の「リスク」の専門家からなる本学会ならではの取り組みを推進

■ リスク教育プログラムTG

- 体験学習法によるリスク教育プログラムの作成と実践体制の構築

■ レギュラトリーサイエンスTG

- リスク学研究を国内外の規制課題の解決に向けて、産官学民が共同で取り組めるようなプラットフォームづくり

■ リスク用語TG

- 多様な分野のリスク関連用語・評価枠組みの差異を認識・整理するための取り組みを推進

現状認識

- これまで行われてきた経験してきたリスコミは、対象が限られてきた(地域、利害、関心、科学的素養など)
- 福島原発由来のリスコミは、日本が初めて経験した全国民対象のリスコミである
- 福島関連では、「説明」「教育」「説得」の方向に進んでいて、「コミュニケーション」の、情報を受ける市民が意思決定に(いろんな形で)参加するという側面が疎かになっている。
(市民参加型、ステークホルダー関与!)
- 行政からは揉め事の解決ツールだと誤解されている。「リスクコミュニケーション」に対する期待が高すぎる
(リスクコミュニケーションについての誤解!)

現状認識を踏まえた学会の取組み

- 学際性を基盤として、リスク問題の根底にあるリスク評価、リスク認知、リスク管理、リスクコミなどを含めたリスクガバナンスの推進
- リスクマネジャー制度を利用した人材育成の推進
- TGによる学会からのリスク関連の情報発信